

11	小国309
学図	

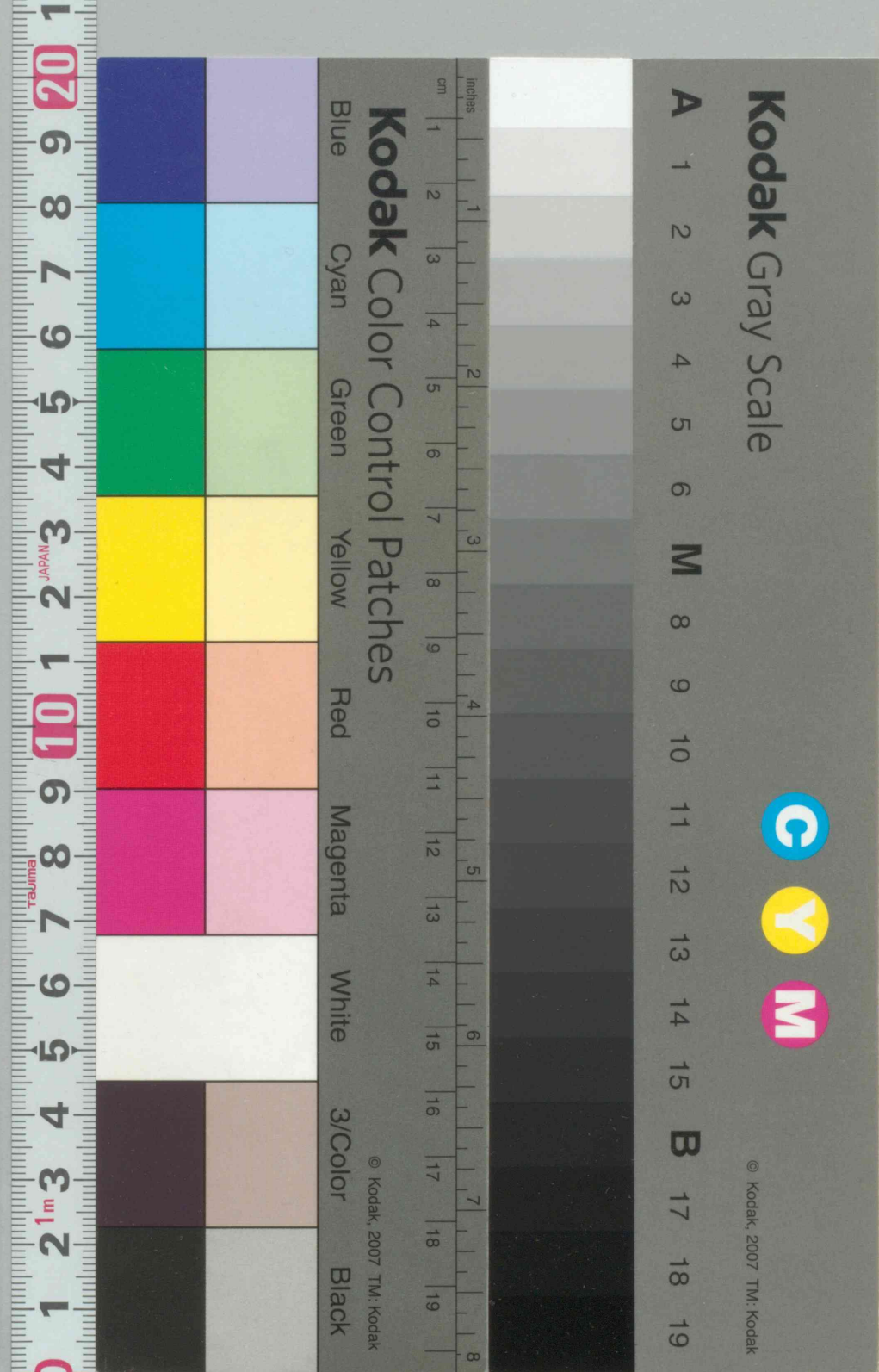
国語三年生上

教育部省検定教科書
 法財団法人 学校図書研究会 編修
 教科書文庫
 6
 810
 34-1949
 0130449665



小KC
 G16
 fe

学校図書株式会社発行



60384
 教科書文庫
 6
 810
 34-1949
 01309
 49665
 528



寄 贈

中央図書館

広島大学図書

0130449665



国

語

三

年

生

上

教科書文庫

6

810

34-1949

0130449665

昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語科用

学校図書株式会社発行

広島大学
教育学部図書

広島大学図書

0130449665





もくろく

(一) あたらしい友だち

一 なかむらはるおくん

4

二 わからないことば

12

(二) てんじばん

一 おしごと

18

二 みんなのうた

21

三 ペニーのなまえ

25

四 こま

29

五 てんじばんを見て

34

(三) おもしろい研究

一 おたまじゃくし日記

39

二 くも

48

三 先生の顔

53

(四) わたくしたちのげき

一 カをあわせて

62

二 森の中

65

(五) いろいろな話

一 ろばを売ろうとしたおや子の話

83

二 じまんのかきの木

89

三 二ひきのいぬ

101

おしごとの手びき

111

あたらしくてたことば

122

かん字

127



(一) あたらしい友だち

一 なかむらはるおくん

三年生になって、まもないある日のことです。

先生が、ひとりのあたらしい友だちを、つれておいでになって、「この人は、なかむらはるおくんといいます。こんど、この学級にはいることになりました。はるおくんは、学級のようにすもわからないし、町のようにすもわからないので、みんなでしんせつにしてあげなさい。」

と、おっしゃいました。なかむらくんは、

「ぼくは、いなかの学校からかわってきました。なかよくあそびま

しょう。」

と、あいさつをしました。いさむくんが、

「お友だちになろう。」

と、大きな声をだしたので、みんながわらいました。

なかむらくんは、まさおくんとおなじつくえにならびました。なかむらくんが本をもってきていなかったのを、まさおくんはじぶんの本を見せてあげました。

ひるのお休みのとき、まさおくんは、なかむらくんといっしょにとしょしつに



いきました。

たくさんの人が、本を読んでいます。しずかに読んでいる人もあります。一さつの本のまわりにあつまって、小さな声で話しあっている人もあります。

六年生のかかりの人でしょう、二年生らしい女の子に、本をだしてあげています。なかむらくんは、

「本がたくさんあるね。ぼくも読みたいな。」
と、いいました。

「ここには、だれがはいつて本を読んでもいいのだよ。かかりの人
にいうと、すぐ、だしてくれるよ。」

と、まさおくんがいいました。

それから、うんどうばにでました。みんなが、げんきよくあそんで
います。

まさおくんの学級の畑にいくと、きれいなはなが、たくさんさい
ていました。なかむらくんは、

「きれいなはなだね。」と、いいました。

「この畑は、ぼくたちが作っているのです。もっときれいなはなが
たくさんさくよ。」

と、まさおくんはいいました。

はじまりのかねがなったので、ふたりは、きょうしつへいきました。
た。



○
たいいくのときでした。四くみにわかれて
リレーをしました。はるおくんは、三くみに
なりました。

はじめは、三くみが勝っていましたが、は
るおくんのところで、負けてしまいました。
二かいめも、はるおくんのところで負けま
した。

「はるおくんのような人がいてはだめだよ。
なんどしても負けてしまう。」
と、三くみの人は、ふへいをいいはじめまし

た。

はるおくんは、とうとうなきだしてしまいました。

まさおくんは、きのどくでなりませんでした。

そのことがあってから、はるおくんは、学校へきてもだまってい
ます。まさおくんが、いろいろとなくさめてあげても、やっぱりだ
まっています。

そののち、また、リレーがありました。はるおくんは、まっかな
かおをして、いっしょうけんめいに走りました。

三くみはやっぱり、はるおくんのところで負けました。

○
まさおくんの町のしんぶんしゃが、子ども
の作文をあつめました。

まさおくんの学級からも、たくさんだ
しました。なかむらくんの「あめ」という
たが、一とうになりました。まさおく
の学級の人たちは、みんなよろこび
ました。

おべんとうのとき、先生が、

「きょうのしんぶんを見ると、なかむ
らくんのうたが、一とうになっていま
す。これは、なかむらくんだけでなく、
この学

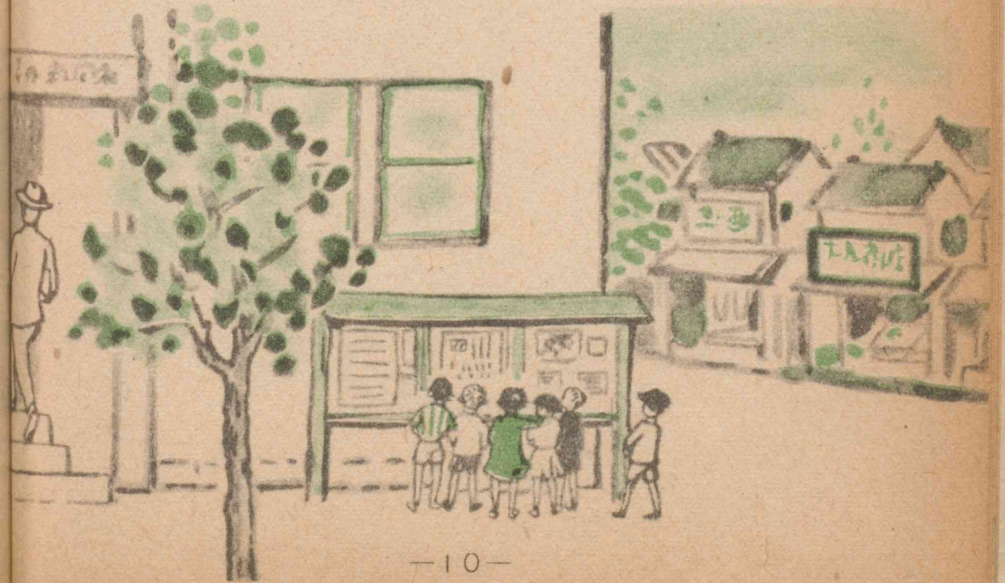
級としてもうれしいことです。なかむ
らくんのうたは、ほんとう
によくできています。

このあいだ、なかむらくんの走るの
がおそいといつて、ふへいを
いった人があったそうですが、勝
ち負けは気にしないで、いっし
ょうけんめに走ったらいいのです。

人には、じょうずなことと、へたな
こととがあります。じょうず
だといつて、じまんをしてはいけ
ません。へただといつて、元氣
をなくしてもいけません。」

と、おっしゃいました。

なかむらくんは、うれしそうにき
いていました。



二 わからないことば

ある日、まさおくんは、なかむらくんのうちに遊びにいきました。なかむらくんは、おかあさんといっしょに、畑の草をとっていました。畑の近くに、大きなかきの木があります。ふたりは、かきの木にぶらんこをかけて遊びました。

しばらくして、おかあさんが、

「はるお、畑をうつからくわをかってきてね。」

と、おっしゃいました。なかむらくんは走っていきましたが、まもなく、一本のくわをもって帰りました。

まさおくんが、

「なかむらくん、どこでかってきたの。」
ときくと、

「おとなりでかってきたよ。」

と、いいました。

まさおくんは、おかしいなと思いました。

なかむらくんの家のおとなりは、たばこやと

さかなやです。まさおくんは、また、

「おとなりに、くわを売るみせはないでしょう。」

というと、なかむらくんは、

「たばこやさんでかったよ。」

と、いいました。まさおくんはふしぎに思いました。



「たばこやさんに、くわを売っているの。」

ときくと、なかむらくんはやっぱり、

「たばこやさんでかっってきたんだよ。」

と、いいます。このときおかあさんが、

「まさおさん、はるおはくわをかりてきたのです。いままでいたところでは、『かりてくる』ことを『かっってくる』というのです。と、いって、おわらいになりました。まさおくんが、

「おかねをだして買うのと、まちがうんじゃないの。」
というと、なかむらくんは、

「おかねをだすときは、『こうてくる』というのだよ。」
と、いいました。

夕はんのとき、まさおくんがなかむらくんからきいた、おもしろいことばの話をする時、おとうさんは、

「おとうさんもことばがわからないで、こまったことがあったよ。」
と、いって、つぎの話をしてくださいました。

「ある」と「ない」

おとうさんが、あるいなかにいったときのことです。

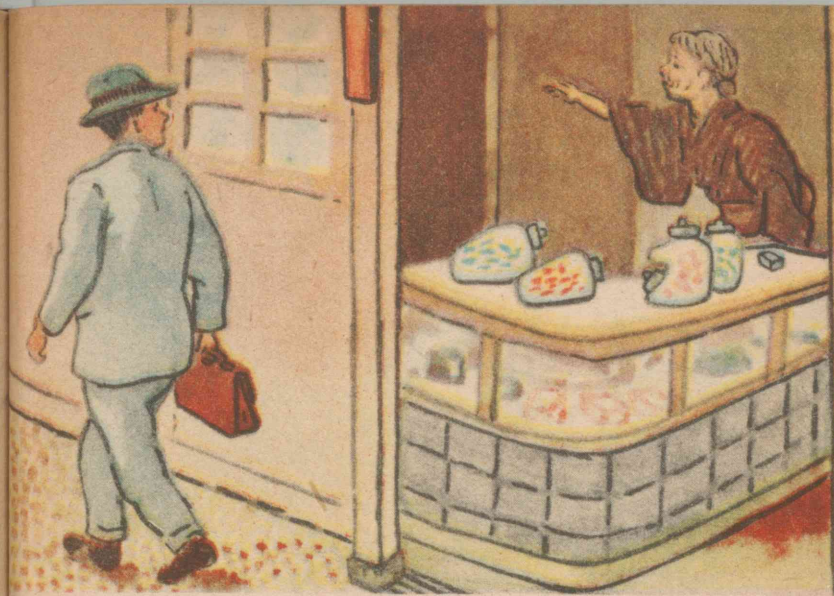
たばこやにはいって、

「たばこがありますか。」

と、ききました。すると、みせにいたおばあさんが、

「なあい。」

と、へんじをしました。ないのだなと思って、むこうにいきかける



と、おばあさんが、

「もうし、もうし。」

と、大きな声でよびます。おかしいことだと思っ
てひきかえました。

すると、おばあさんがたばこをだしてくれ
ました。

「ない。」というのにあったので、ふしぎでた
まりません。

そのばん、友だちのうちへ行って、この話
をしました。友だちは、

「このへんでは『はい』というへんじを、『な

い』とか、『なあい』とかいうのだ。よその人はよくまちがえるよ。」
と行って、わらいました。おとうさんは、こんなおもしろいことば
が、よくもあるものだと思いました。

まさおくんが、

「そのへんの人はだれでも、そんなわからないことばをつかってい
るのですか。」

ときくと、おとうさんは、

「いや、そんな人は少なくて、多くの人は、だれにでもわかる『は
い』ということばをつかっているよ。」

と、おっしゃいました。

(二) てんじばん

一 おしごと

まさおくんたちの教室には、てんじばんがあります。それには、みんなの書いた、作文やえをはりだします。みんなの作ったいろいろなものを、はりだすこともあります。

じぶんの作ったものが、ここにはりだされると、だれでも大よろこびです。おうちの人も、ときどき見に

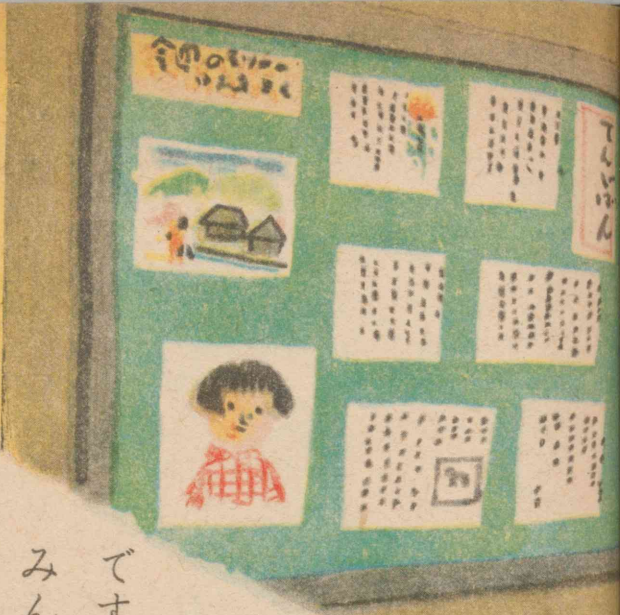


いらっしゃいます。

二年生のときには、先生がいつもはりだしてくださいましたが、三年生になってからは、かかりの人をきめてはりだすことにしました。

まさおくとすみこさんが、そのかかりです。

みんなは、じぶんの作ったものを、かかりの人にだしました。みんなの作ったものが、つきつきに集まります。たくさん集まって、いちどにははれないので、じゅんじゅんにはりだすことにしました。



まさおくんは、すみこさんと話しあって、はじめに、うたと作文を
はりだしました。

かずこさんの「ダリヤ」といううたを、はりだしました。

はるおくんの「あめ」といううたを、はりだしました。

たかしくんの「波」といううたを、はりだしました。

みちおくんの「あり」といううたを、はりだしました。

ゆきこさんの「ペニーのなまえ」という作文を、はりだしました。

いさむくんの「こま」という作文を、はりだしました。

みんなのものが、たくさんはりだされました。

てんじばんのまえに集まって、みんなはうれしそうに話しあっています。
先生も、にこにこしながら見ていらっしやいます。

二 みんなのうた

ダリヤ

白いかびんに

ダリヤの花が一本、

しずかにさいている。

ガラッと、とをあけて

わたしがはいると、

おはようと

にっこりわらった。

朝の教室。



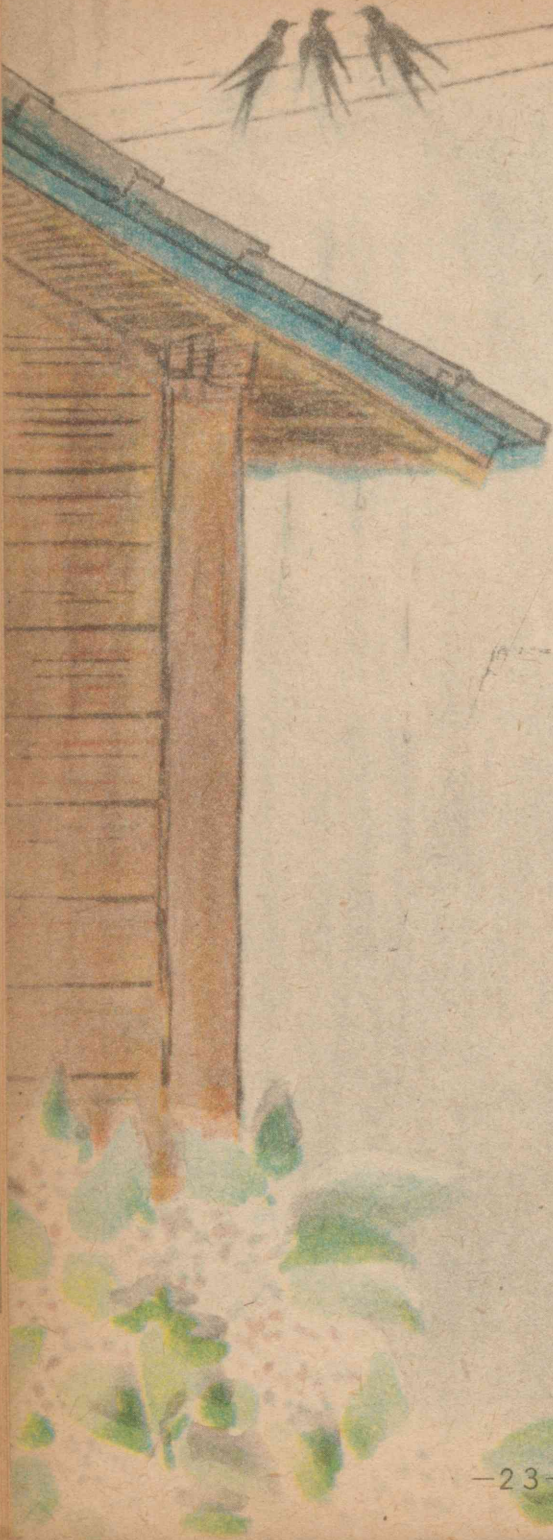
あめ

あめがしずかにふってます。
金の水たま、ぽっつりこ、
銀の水たま、ぽっつりこ、
かきのわかばがおどります。

あめがしずかにふってます。
たかいやねから、ぽったりこ、
ひくいやねから、ぽったりこ、
あとからあとからおいかける。



あめがしずかにふってます。
つばめ三ばがでんせんに、
なかよくならんで話してる。
早くお帰りさむいでしよう。



波

銀のおすなのおぎしきへ、
むこうのほうからやってきて、
ちょっと話してすぐ帰る。
なにを話すの、波とすな。

あり

にわのかきの木に一ぴきのあり、
光るところにとまっている。
小さなかげもできている。



三 ペニーのなまえ

わたくしが、学校から帰ってべんきょうをしていると、
「ゆきこ、いぬをもらってきたよ。」

という、おとうさんの声がきこえました。

わたくしは、うれしくてとんでいきました。

おとうさんは、

「この中にいるのだよ。かわいがってやりなさい。」

とおっしゃって、じてんしゃからはこをおろしました。

どんないぬだろうと思って、わたくしは、はこの中をそつと見ま
した。すると、くろい毛のかわいらしいいぬがうごいています。

そのいぬは、わたくしが小さいときに持っていた、おもちゃのくまにそっくりです。

「まあ、かわいい。」

といって、わたくしは、すぐ、はこからだしてやりました。

いぬは小さなおをふって、うれしそうにじゃれつきます。

「そうそう、なまえをつけてあげよう。」

と、思って、わたくしはしばらく考えました。

いつか、お話の本で読んだ、かわいい女の子のペニーというのがいいと思って、「ペニー、ペニー」と、よんでみました。

いぬは、目をほそくして、わたくしのかおをじっと見ます。

わたくしが、「ペニー、ペニー」といって走りだすと、ペニーもうれ

しそうに走ってきます。

わたくしは、すぐ、ペニーとお友だちになりました。

つぎの日の夕はんのときです。おとうさんが、

「みんながいぬに、なまえをつけてあげよう。」

と、おっしゃいました。すると、にいさんが、

「くまの子によくにているから、くまという

なまえにしよう。」

と、いいました。そうして、「くまちゃん、

くまちゃん。」と、よびました。

ペニーは、きよんととして、しらないようなかおをしています。



こんどは、おかあさんが、

「くまちゃん、くまちゃん。」と、およびになりました。

やっぱり、ペニーは、なんのことだろうというようなかおをしています。こんどは、わたくしが、

「おとうさん、わたくしがよんでみますよ。」

と、いって、「ペニー、ペニー。」と、よびました。

ペニーは、うれしそうにおをふって、わたくしのほうを見ました。おとうさんが、

「ゆきこのつけたなまえをおぼえてしまっているよ。かんしんなものだ。じゃあ、やっぱりペニーとよぶことにしよう。」と、おっしゃいました。

四 こま

日あたりのいいえんがわでぎっしを見ていると、色ごまのえがでていました。

「これはおもしろい、ぼくも作ってみよう。」

そう思いつくと、もう、じっとしてはいられません。そこへ、みちおくんが遊びにきたので、いっしょに作ることにしました。

はじめに、かいてんばんを作るのです。おとうさんから紙のはこをいただいて、それにまるい形を書きました。

なんべんも書きましたが、なかなかうまく書けません。

みちおくんが、



「まさおくん、いいことがある。コップで形をとったらいいよ。」

といたので、おかあさんからコップをかりて、まるい形をふたつ書きました。それをきりぬいで、ひとつずつ作ることにしました。

つぎは、かいてんばんにもようを書くのです。

ぼくはあお色と、き色にぬりわけました。

みちおくんは、赤色とあお色にぬりわけました。

こんどは、こまのしんぼうを作るのです。たけのはしをまるくけずって、それを、かいてんばんのまん中にあけたあなにさしこみました。これで、すっかりこまができあがりしました。

ぼくはうれしくてたまりません。すぐ、つくえの上でまわしてみました。みちおくんもまわしました。

ふたつのこまは、気持のいい音をたててまわります。ぼくのは、きれいなみどり色に見えます。みちおくんのは、むらさき色に見えます。

五・六回まわしているうちに、だんだんあなが大きくなって、かいてんばんがぬけてしまいました。みちおくんのもぬけそうになりました。ぼくはいろいろ考えているうちに、しんぼうの上のほうをほそく、下のほうをふとくするといいいことに、気がつきました。

そこで、もういちどやりかえました。

こんどは、まえのようなことはありませんでしたが、なんべんも

まわしているうちに、かいてんばんとしんぼうの間がゆるくなって、すべるようになりました。みちおくんが、

「これは、しんぼうがまるいからだめだよ。こんどは、かいてんばんとしんぼうのあうところを、四かくにしてみよう。」

といったので、また、作りかえました。

こまは、じつとすわって、どちらにもよくまわるようになりました。みちおくんが、

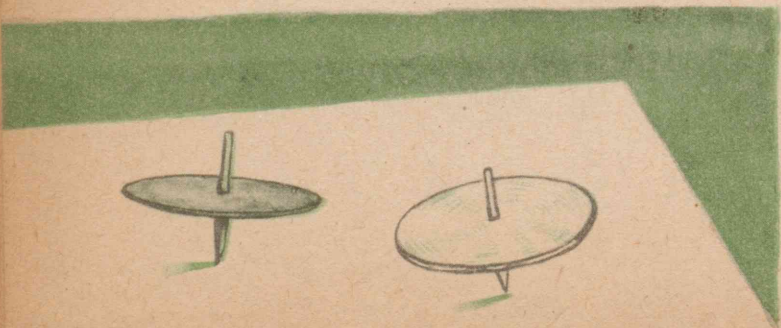
「どちらがよくまわるか、きょうそうをしよう。」

といったので、まわしあいをすることにしました。

「一、二、三。」

で、さっとまわしました。ふたつのこまは、つくえの上を右へ左へうごきながらまわっています。しばらくして、ぼくのがふりだしたかと思うと、だんだんよわってきました。とうとう、ころがってしまいました。

なんべんもまわしてみましたが、やっぱり、ぼくのほうが悪けてしまいました。ぼくはふしぎに思って、みちおくんのこまとくらべてみました。すると、ぼくのはしんぼうの足が長いのです。そこで、少し短くきって、また、まわしあいをしました。こんどは、みちおくんとおなじくらい、よくまわるようになりました。それからぼくたちは、いろいろ形のちがったこまを作って遊びました。



五 てんじばんを見て

てんじばんを見て、みんなで話しあいをする事になりました。

まさお 「てんじばんを見て気のついたことを、どんどんいってください。

さい。

みちお 「ぼくは、てんじばんにはりだされたうたや作文を見ると、

いろいろなべんきょうができるので、いいと思います。」

かずこ 「わたくしもそう思います。それから、お友だちがおうちで

していることもよくわかります。」

たかし 「ぼくは、はるおくんの『あめ』のうたを読もうと思ったの

ですが、高いところにあるのでよく読めませんでした。」

いさむ 「そうです。うたや作文は、よく読める高さにはったほうが

いいと思います。」

みんな 「そうです。」

すみこ 「わたくしは、そんなところまで気がつきませんでした。」

はるお 「いま、はってあるのは、いつとりかえるのですか。」

まさお 「みんなで話しあってください。」

みちお 「十日ぐらいがいいね。」

ゆきこ 「それは、少し長いのではない。わたくしは、一しゅうかん

ぐらいがいいと思います。」

はるお 「それがいい。」

かずこ 「わたくしもいいと思います。」



まさお 「では、一しゅうかんではりかえることにしよう。」

先生 「みんな、なかなかいい考えができました。てんじぼんのはりかたがこれできまりましたね。こんどは、はりだされたうたや作文のことを話しあいましょう。」

「先生、ぼくがお話します。」

「わたくしもお話します。」

あちらからもこちらからも、手があがりました。

みんなは、じゅんばんにお話をすることにしました。

ゆきこ 「はるおさんの『あめ』のうたは、ちょうしがいいと思います。」

みちお 「『ぽつつりこ、ぽつつりこ』というところは、あめのふつ

ている音がきこえるようです。」

かずこ 「『ペニーのなまえ』の作文では、ゆき

こさんが、ペニーをかわいがっている
気持がよくでています。」

たかし 「ぼくは、ペニーが自分のなまえを、す

ぐおぼえたのにかんしんしました。」

まさお 「『波』のうたは、波を人のように書い
ているのが、おもしろいと思います。」

はるお 「みちおくんの『あり』のうたは、かげ
までもよく見て書いてあるのに、かん
しんしました。」

まさお 「『ダリヤ』のうたは、しずかできれい

な朝の教室のようすが、よくでています。」

すみこ 「『こま』の作文は、自分のしたことをじゅんじょよく書いています。」

みちお 「いさむくんが、なんでもそのわけを考えてするのに、かんしんしました。ぼくもこれから、いさむくんのようにしようと思います。」

先生 「てんじばんのことも、うたや作文のことも、なかなかいいお話ができました。」

これからも力をあわせて、てんじばんをもっとりっぱにしていきましよう。」

みんなは、こんどのお話しあいがたのしみです。

(三) おもしろい研究

一 おたまじゃくし日記

三月十三日

にわのいけで、へんなものをみつけました。

おとうさんにきくと、

「これは、かえるのたまごだよ。なにかにいられてかってごらん。きつと、おもしろいことがわかるよ。」と、おっしゃいました。

ぼくは、それをきんぎょばちに入れてかうことにしました。



三月十五日

かんでんのひものようなものの中にあつたたまごが、ひもの外へ
でてきました。

ぼくは、どうしてたまごがひもからでてきたのか、ふしぎでたま
りません。

三月十七日

まるかったたまごが、少し長くなってきました。中には、だるま
のようになつてゐるものもあります。

おとうさんが、

「日あたりのいいところへだしてはどうかね。」

とおっしゃったので、えんがわにだしてやりました。

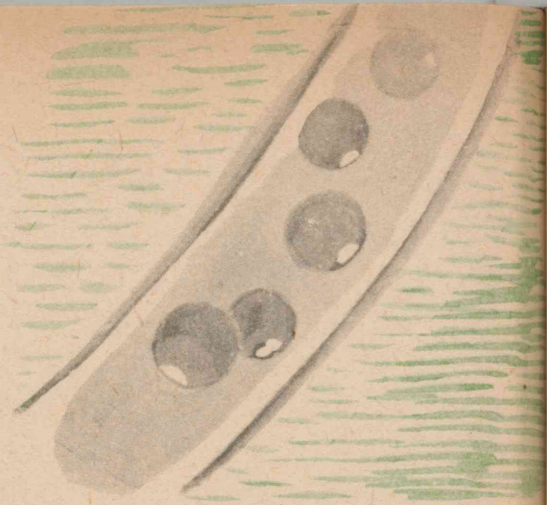
三月二十二日

くろいだるまのようなものは、だんだんほ
そ長くなって、はじめよりも少し大きくなつ
てきました。

みんな、かんでんの上に立ったようになって
います。上のほうから、手のようなものが
でてゐるものもあります。

おとうさんにきくと、

「あれはえらだよ。おたまじゃくしは、小さ
いときには、あのえらで息をするのだ。」
と、おっしゃいました。



三月二十六日

たまごは、一センチメートルぐらいになりました。もう、おたまじゃくしの形をしています。

おが少しのびてきたようです。みんなからだを立てて、きんぎよばちのまわりにすいついています。

ときどき、からだを動かすのもあります。

三月三十一日

元気のいいのが三びき、おをふりながらおよぎまわっています。

じっと見ていると、いままで、きんぎよばちのまわりにすいついていたのも、おをふりだしました。

「おや。」と思っていると、みんな、だんだん上のほうへのぼってき

ました。

どのおたまじゃくしも、二センチメートルぐらいになっています。

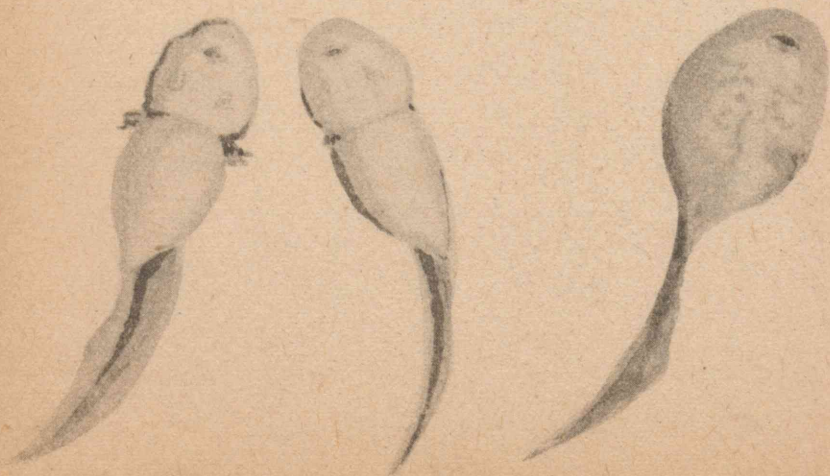
おなかに、うずまきのようなものが見えます。

四月一日

おたまじゃくしは、なにをたべているのだらうと思つて、おかあさんにきくと、

「もをたべるのですよ。」

とおっしゃったので、にわのいけから、もを取ってきて入れてやりました。



おたまじゃくしは、うれしそうにもにすいつきました。

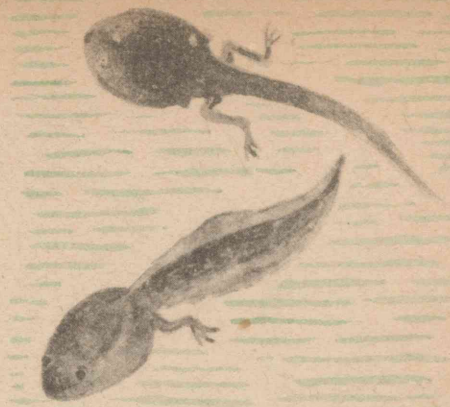
四月十一日

おたまじゃくしは、みんな元気よくおよぎまわっています。

かわいいあと足が、ではじめたの也有ります。

四月十三日

おとうさんがごらんになって、



「こんなに大きくなると、小さい虫をやらないといけないうよ。」

と、おっしゃいました。

なにをやったらいのかわからないので、おかあさんにきくと、「ぼうふらがいいでしょう。」

とおっしゃったので、ぼうふらを取ってきて入れてやりました。

おたまじゃくしは、すうつとおよいできて、ぼうふらをたべます。

五月二十二日

あと足は大きくなりましたが、まえ足は、左のかたほうがではじめただけです。

いままで小さかった目が大きくなって、はっきり見えてきました。
五月二十五日

右のほうのまえ足がでてきました。これで、あと足とまえ足がそろいました。

どの足にも、ゆびが三本あります。

なんだか、おたまじゃくしではないような気がしました。

五月二十八日

おたまじゃくしは、だんだんおが小さく
なってきました。

ところが、ふしぎなことに、このごろ死
ぬものが多くなりました。

いきのこったのをじっと見ていると、み
んなどびあがって、きんぎょばちの外へで
ようとしていきます。

おとうさんにきくと、

「おたまじゃくしは、大きくなると水の上
へでて空気をすわないと、死んでしまっ

のだよ。」

と、おっしゃいました。

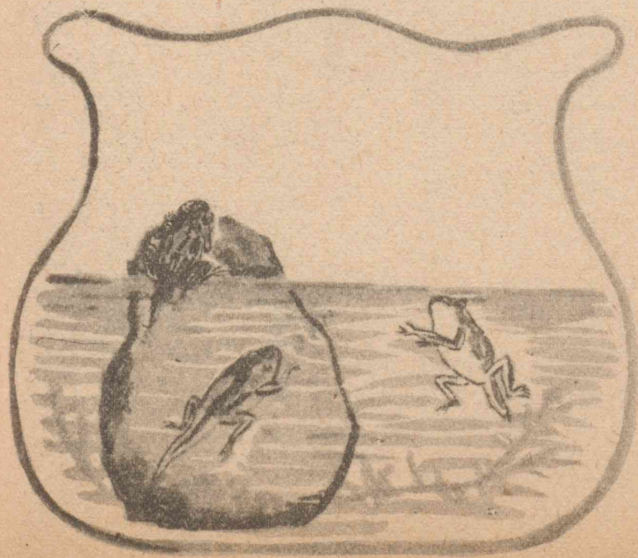
ぼくはすぐ、大きな石をいれて、そのはんぶんぐらいが、水の上
へでるようにしてやりました。

おたまじゃくしは、石の上にあがったり、水の中をおよぎまわっ
たりしてうれしそうです。

六月十二日

おはすっきりなくなりました。おたまじゃくしは、とうとう子が
えるになりました。

三月十三日からはじめたおたまじゃくし日記は、きょうでおわり
にしようと思います。



二 くも

あつい夏の日のくれがたでした。

ぼくがにわで遊んでいると、「ブーン」。

という、音がしました。

「あっ、はちだ。」

ぼくは、ぼうしでさっとはらいました。

はちは、おどろいてにげていきましたが、もみじの木にはってあった、くものあみにかかってしまいました。

ぼくは、「どうするかな。」と思ひながら、じっと見ていました。



はちは、いっしょうけんめいにげようと思いますが、なかなかにげることはできません。

足がはなれたかと思うと、こんどは、はねのほうがかくつついてしまいます。はねのほうがはなれたかと思うと、また、足がかくつついてしまうのです。

はちがいっしょうけんめいに動くので、くもの糸はだんだんきれてきました。

もう少しで、にげられそうになりました。ところが、はちはしだいに弱ってきました。

そのときです。どこにいたのか、一ぴきの大きなくもが、すうつとあみへ走りよってきました。

くもは、はちとはんたいのほうへいきかけましたが、まちがったと気がついたのでしょう。急いでひきかえして、はちのほうへよってききました。そうして、さっとくみつきました。くみついたかと思うと、はなれました。はなれたかと思うと、また、くみつきました。くもとはちは、しばらくあみの上をころげまわっていましたが、くもは、おしまいはたくさん糸をだして、とうとうはちをまいてしまいました。

しばらくすると、くもはまきつけていた糸を、かみきったようでした。

「これからはちをたべるのだな。」

と見て見ていると、くもは、はちをひっぱって、さっさとみじの下の草の中にかくれてしまいました。

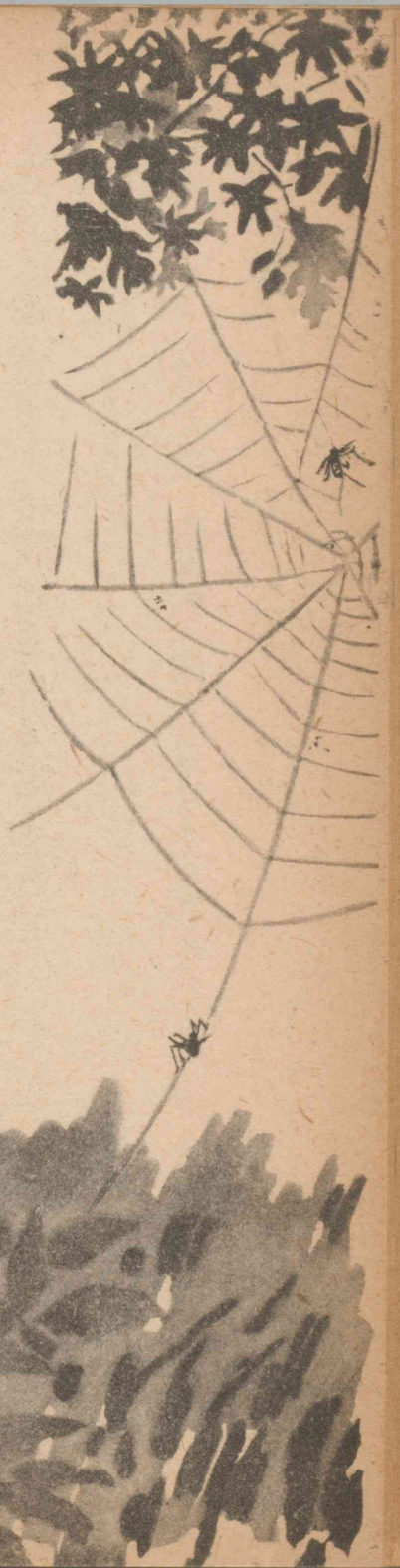
そのとき、ぼくにはわからないことがひとつできました。それは、あみにはちのかかったことが、くもには、どうしてわかるのだろうかということでした。

ぼくは、「よし。」と、思って、小さなぼうをひろいました。そのぼうで、くものあみをしずかにつついてみました。

すると、どうでしょう。まえのくもがまた、草の中であみのほうへ、のぼってくるではありませんか。

「でたぞ、でたぞ。」

と、思って、ぼくはくもがのぼってくるのを、じっと見ていました。くもは、あみからたれた一本の糸をのぼっていきます。



「あ、わかった。」

ぼくは、思わず大声をたてました。

あみからは、一本のキラキラ光る糸がひかれています。くもは、その糸を持って、草の中にかくれているのです。虫がかかって動くと、あみがゆれるので、くもは糸をのぼってくるのです。

「くもはなかなかりこうだな。」

と、ぼくはかんしんしてしまいました。

三 先生の顔

(一)

みんなのまえに、お立ちになった先生が、

「さあ、これから、先生の顔を書いてください。」

と、おっしゃいました。みんなは紙とクレヨンをよういして、先生の顔を書くことにしました。

「先生、動かないようにしてください。」

みんなは、先生の顔を見ながら、いっしょうけんめいです。あとで、できあがったのを見せあいました。

細長い顔、まるい顔、四かくな顔、いろいろおもしろいえがたく

さんできて、大わらいをしました。

「では、こんどはえに書かないで、先生の顔を写生してください。」

と、おっしゃいました。

みんなはわからないようです。

「えに書かないで写生はできませんよ。」

と、だれかがいいました。すると、先生は、

「えに書かないで、写生はできませんか。」

よく考えてごらん。」

と、おっしゃいました。みんなはどうして

いいのか、こまっけてしまいました。

先生は、みんなの顔を見ていらっしゃいましたが、

「それでは、いま写生したときに、どんなことに気をつけて書いたか話してごらん。」

と、にこにこしながらおききになりました。

たかしくんが立って、

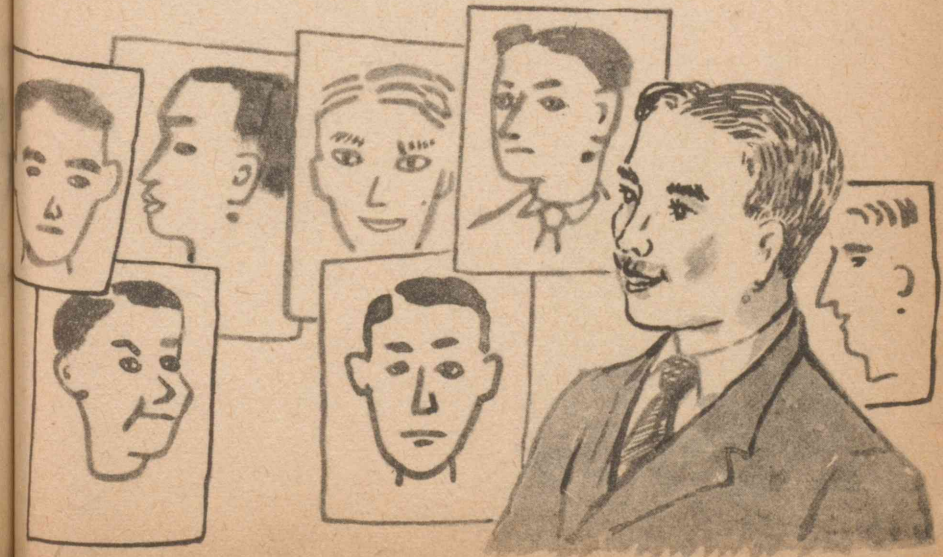
「先生の顔は細長いので、細長くなるように形をとりました。」

と、いいました。先生はこくばんに、

「先生の顔は細長い。」

と、お書きになりました。つぎに、いさむくんが立って、

「先生の耳の下には、大きなほくろがあります。ぼくはそれに気をつけて書きました。」



と、大きな声でいいました。

先生はまた、

「先生の耳の下には、大きなほくろがある。」

と、お書きになりました。こんどは、かずこさんが、

「先生は、大きな目をしていらっしゃいます。わたくしは、それに気をつけて書きました。」

と、いいました。

先生は、みんなのいったことを、ひとつひとつ、こくばんにお書きになりました。そうして、

「いま、みなさんのいったことを、ことばどおりに書いたのですが、これで先生の顔を写生したことになりますか。」

とおっしゃって、こくばんに、

「ことばで写生する。」

と、お書きになりました。みんなは、はじめて気がつきました。

それからめいめい先生の顔を、ことばで写生することにしました。

いさむくんの書いた先生の顔

先生の顔は、少し細長くて、ほおのほねがでています。色が白くてやさしそうです。大きなまゆげがよく動きます。耳の下には大きなほくろがあります。おわらいになると、目のよこにたくさんのしわができます。



かずこさんの書いた先生の顔

先生は、大きな目をしていらっしゃいます。
おわらいになるときは、目が細くなります。頭には、まっくらなかみがあって、いつもきれいにわけていらっしゃいます。口のところにひげがあります。

(二)

こんどは、顔ばかりでなしに、自分の書きたいと思うものを、めいめい写生することにしました。

たかしくんはうんどうばにあって、一年生がリレーをしているところを、写生しました。

「一年生が、二くみにわかれてリレーをしています。ひとりの女の

子が、少しあとからおっかけています。

見ている人はみんな、『しっかり、しっかり。』と、手をたたいています。』

まさおくんは、学校のにわにある池を写生しました。

池のまわりには、もみじの木があって、くろいかげが水に写っています。風がふくと、かげがのびたり、ちぢんだりします。

池の中には、すいれんがうえてあります。まっ白な花が、いつつさいています。

はちが一ぴき、花の中にはいたりしていません。
すいれんの葉の下を、ときどきふながすうっとおよいでいきます。」

ゆきこさんは、自分たちの教室を写生しました。

「教室のまえには、大きなこくばんがかけてあります。こくばんには、『ことばで写生する。』と、書いてあります。」

こくばんのまえには、先生のつくえがあります。つくえの上には、白いかびんがあって、ひまわりがさしてあります。

教室の右のほうは、ガラスまどになっています。ガラスまどの外はろうかです。

左のほうもガラスまどで、とおくにあおあおとした山が見えます。

教室のうしろには、てんじばんがかけてあります。てんじばんには、わたくしたちの書いた歌や作文が、いっぱいはってあります。

たかしさんの書いた、きしゃのえがはってあります。

みちおさんの書いた、うさぎのえがはってあります。

わたくしの作った、『朝の海』という歌もはってあります。

いろいろな歌や作文が風にひらひらしています。」

ことばの写生をはじめると、おもしろくてやめられません。

まさおくんたちは、つぎつぎといろいろなものを写生しました。

できるだけ長く写生したり、できるだけ短く写生したりしてみました。

(四) わたくしたちのげき

一 カをあわせて

まさおくんは友だちと話しあって、九月のたんじょう会のとき、「森の中」というげきをしました。

はじめに、やくわりをきめました。

でる人は、ありのやくふたり、うさぎのやく四人、りすのやくふたり、さるのやくひとり、とらのやくひとり、十人います。

「だい本」を読んで、女らしいことばをつかっているやくには、女子がなりました。男らしいことばをつかっているやくには、男子がなりました。

まさおくんがとらのやくになり、また、みんなのせわもすることになりました。

つぎに、「本読み」です。みんなで、やくわりのとおりに読んでみました。すみこさんの声が小さいので、「大きな声をだすように」というと、はずかしそうにしていました。元気をだして読みました。たかしくんが、あまり声をつくるので、おかしくなってみんながわらいました。

ひととおりに、「本読み」ができました。自分のつかうどうぐをつくってくることをきめて帰りました。



あくる日も、そのつぎの日も、「本読み」です。

よっかめから「ぶたいげいこ」をはじめました。自分のいうことをわすれたり、お話をするようにいえなかったりして、なんどもやりなおしました。

それから一週間、みんな力をあわせてけいこをしたので、やっとできるようになりました。

ぶたいのうしろには、大きなえを書いてはりました。

よういがすっかりできて、いよいよ、みんなのまえですることになりました。

二 森の中

まくがあくと、左手からとらがでてきます。

とら 「ああ、おもしろい、おもしろい。森の中のものはみんな、

ぼくのかにかんしんしているようだ。森の中で、一ばん強いのはぼくだ。」

「おや、だれかくるようだ。またいじめてやろう。」

右手のほうを見て、急いで木のかげにかくれます。りすが二ひき、右手からでてきます。

りす一 「にいさん、あの大きな木の下でひろいましょう。」

りす二 「そうね。たくさんひろっておかあさんを喜ばせてあげよう。」

りすー 「そうしましょう。」

りすは、大きな木の下に走って行って、木のみをひろいます。しばらくして、

りすー 「にーさん。たくさんあるね。もういくつひろったの。」

りすニ 「二十ひろったよ。」

りすー 「早いわね。わたしはやっと十よ。」

りすニ 「おいしそうなみだね。おかあさんが、きつと喜んでくださるよ。」

そのとき、木のかげからとらがでてきます。

とら 「りすくん。」

りすはにげようとしています。とらは、ニひきのりすをつかまえます。

とら 「ひろったものを、みんなだしてしまえ。ぼくにだまってひろうと、

ゆるさないぞ。」

りすニ 「とらさん、どうぞゆるしてください。おかあさんが病気で、たべものがなくてこまっているのです。」

りすー 「ほんとうです。ゆるしてください。」

とら 「だめだ。ひろったものをそこにお





け。おかないといじめるぞ。」

とらは、りすをたおします。りすはころげて、ひろったみをおとします。

とら 「あははは、いい気持だ。ぼくのいうことをきかないと、たいへんなことになるぞ。」

「ああ、おもしろかった。もう帰ろうかな。」

とらは、右手へはいります。りすは、「いたい、いたい」といながら、おきあがります。

りす一 「にいさん、けがはしなかったの。」

りす二 「おまえこそ、けがはしなかったか。」

りす一 「わたしは頭をけがしました。」

りす二 「たいへんなことになったな。さあ、急いで帰ろう。また、とらがきたらこまるから。」

二ひきのりすは、急いで左手へはいります。右手からうさぎが三びきでてきます。

うさぎ一 「まいにち、いいお天気がつづいて、遊ぶのにいいね。」

うさぎ二 「木のみもたくさんあって、秋はほんどにいいね。」

うさぎ三 「わたしは、秋がーばんすきよ。」

うさぎ二 「思わず、おどりたくなりますね。」

うさぎ一 「ほんとうにね。みんなでおどりましたよ。」

うさぎ みんな 「そうしましょう。」

三びきのうさぎはおどります。そのとき、うしろのほうでとらのなく声がします。うさぎ一は、その声におどりをやめて、じっとききます。ほかの二ひきはおどりつづけれます。

うさぎ一 「おや、とらじゃないかしら。とらの声、きこえなかった。」

うさぎ二・三もおどりをやめて、

うさぎ二 「きこえませんでしたよ。」

うさぎ一 「でも、おかしいわ。きつと、とらの声ですわ。」

そのとき、右手から、うさぎ四が走ってでてきます。

うさぎ四 「大へんだ、大へんだ。いま、とらにおいかけられていると

ころだ。助けてください。」

みんなは、うさぎ四のところへいって、せわをします。

うさぎ一 「どうしたの。」

うさぎ四 「木のみをひろっていたら、あのとらにみつけれられて、おい

かけられたのです。ああ、苦しい、苦しい。」

うさぎ二 「ほんとうに、あのとらにはこまります。わたしたちは楽しく遊ぶこともできませんね。」

うさぎ三 「どらがいると、この森の中がおもしろくないね。」

うさぎ一 「ここで、ぐずぐずしていると、また、とらがきますよ。早くにげましょう。」

うさぎ みんな 「そうしましょう。」

うさぎ四をつれて、みんな左手へはいります。そのあとへ、と
らが右手からでてきます。

とら 「どうとうにがした。おいしいことをした。あははは、ぼくに
勝つものはおるまい。ぼくは森の中で一ばん強いんだ。あ
あ、おもしろい、おもしろい。おや、だれかくるぞ。」

とらは、木のかげにかくれます。ありが、左手からにもつを持
ってでてきます。

ありニ 「ほんとに、あついな。少し休みましょう。」

あり一 「きょうはつかれたな。」

ありニ 「でも、はたらいたあとの気持はいいものですね。」

あり一 「さあ、でかけよう。」

ありが、にもつを持って、右手へでかけようとするところへ、
木のかげから、とらがでてきます。

とら 「ありくん、まて。」

あり一 「あ、とらさんだ。どうぞゆるして
ください。」

とら 「にもつをおいていけ。」

ありニ 「これは、わたしたちのみつけただ
いじなものです。」

とら 「だせといったらだせ。」

とらは、ありのにもつを取ってしまいます。

とら 「あははは、弱いありだ。このにもつをもらっていくよ。」



とらは、右手へはいります。ありは、残ってないています。

あり一 「やっどこまで持ってきたのに、取られてしまった。」

あり二 「ほんとうにこまりますね。とらがいるので、森の中のものは、どんなにこまっているかわからないよ。」

「ありがとういるところへ、左手からりすがでてきます。」

りす二 「ありくん、どうしてないているの。」

あり二 「いま、とらに、にもつを取られてしまったのです。」

りす一 「ありさんもいじめられたの。わたしたちも、いじめられたんですよ。」

あり一 「ほんとうに、こまってしまふなあ。」

そこへうさぎが三びき、右手からでてきます。

うさぎ一 「みなさん、どうしたの。おそろいで。」

りす二 「とらにいじめられて、こまっているところだよ。」

りす一 「この頭を見てください。こんなにけがをしたのですよ。」

あり一 「ぼくたちは、にもつを取られてしまったよ。」

うさぎ二 「わたしたちの友だちは、おいかけられたんですよ。」

あり二 「こんなことでは、いつも心配ばかりして、おもしろくはた
らけませんね。」

うさぎ三 「わたしたちも、おどりをおどることができませんよ。」

みんな 「どうしたらいいのでしょう。」

りす二 「そうだ。あのりこうなさるさんに、いい考えをだしてもらおう。」



みんな 「いいところに気がついた。さるさんにおねがいしよう。」
ありー 「ぼくがよんでくる。」

ありは、さるをよびにいきます。さるが、左手からでてきます。
みんな 「あ、さるさんがきたよ。」

うさぎ一 「さるさん、おねがいです。わたしたちを助けてください。」
さる 「みんな集まって、どうしたのだね。」

りす二 「きいてください。ぼくたちはみんな、あのとらにいじめられて、こまっているんです。」

りす一 「このけがを見てください。」

うさぎ一 「とらがいると、森の中がおもしろくありません。」

ありー 「さるさん、ぼくたちを助けると思っ、いい考えをだして
ください。」

さる 「いや、ぼくもとらにはこまっているのだ。なにかいい考えはないかなあ。」

みんなでしばらく考えます。急にさるが大きな声で、
さる 「あ、わかった。わかった。」

みんなにささやきます。

りす二 「ぼくがよびにいってきます。」

りすは、右手のほうへでていきます。

うさぎ三 「うまくいくといいね。」

あり二 「とらがいじわるをやめたら、わたし
たちはどんなにうれしいでしょう。」

そのとき、右手からとらがでてきます。

うさぎ四 「とらがきたよ。さあ、みんな力をあわせよう。」

とら 「なんの用事があるのだ。」

さる 「とらさん、わたしたちはみんな、とらさんの力にかんしん
しています。」

うさぎ一 「とらさんの顔を見ただけで、みんなびくびくしています。」

とら 「あははは、このぼくに勝つものはあるまい。」

さる 「ところがとらさん、もっと強いものがあるんだよ。」

とら 「なに、ぼくより強いものがある。」

みんな 「はい、そうです。」

とら 「それはおかしいな。どんなやつだろう。」

うさぎ二

「とらさんによくいますが、とらさんより、もっと強い
ものですよ。」

とら 「いや、ぼくがこの森で一ばん強いんだ。ぼくに勝つものな
んかいるものか。」

あり一 「とらさん、ほんとうにいるんだよ。」

とら 「なに、いる。ようし、ぼくがすぐ負かしてやろう。」

あり二 「ほんとうなのですか。」

とら 「ほんとうだ、どこにいるのだ。」

さる 「そこへつれていってあげよう。そのかわり、きつと負かし
てくれなくちゃいけないよ。」

さるはとらをつれて、池のそばへいきます。みんなも、あとに

ついていきます。

さる 「ごらんなさい。あそこに池がある
だろ。あの池のそばにいるんだ
よ。」

とらは池のそばへよって、中をのぞき
こみます。

とら 「あ、いる、いる。おまえだな、ぼ
くより強いというの。でてこい
森の中で一ばん強いのは、ぼくだ。」
「や、ぼくのまねをしているな。よ
し、負かしてやるぞ。」

とらは、池の中にとびこみます。「助けて、
助けて。」の音がきこ
えます。

りすニ 「あははは、これでみんな楽しく遊べるぞ。」

しばらくみんなだまっています。「助けて。」の音がきこえます。

うさぎ三 「とらさんが、助けて、助けて。」とっているね。

うさぎ二 「とらさんがかわいそうね。とらさんは心からいじわるでは
ないのでしょう。」

あり二 「とらさんも、わたしたちのなかまよ。」

うさぎ四 「あ、とらさんがしずみかけた。」

あり一 「かわいそうだな。みんなで助けてあげようか。」
さる 「うん、助けてやろう。」



みんな 「そうしよう。」

みんなは木を持ってきて、つなをつけ、池の中になげこみます。

みんな 「とらさん、この木につかまりなさい。」

とらは、木につかまります。みんなは「えっさ、えっさ。」と、つなをひっぱります。やっと、とらがあがってきました。

とら 「みなさん、ありがとう。いじわるしてすまなかったね。」

さる 「これから、みんなでなかよくしよう。」

りすニ 「そうだ。みんな友だちになろう。」

うみさぎな 「この森の中を、楽しいものにしましょう。」

とらはにっこりします。まくがしずかにおります。

(五) いろいろな話

一 ろばを売ろうとしたおや子の話

むかし、ろばをかっているおや子がありました。

ある日、ふたりはそうだんして、ろばを売ることになりました。

これをきいた近所の人、

「ぼくに売ってください。」 「わたしのところで買いましょう。」

と、たのみました。

ふたりが、だれに売ろうかと思っ
ているときに、町にいけば、高
く売れるということをききました。

ふたりは、いいことをきいたと思って、町に売りにいくことにしました。

ろばをひいて、山をおりていきました。どんどん歩いていくとむこうから四五人のたび人がやってきます。たび人たちは、近くにくると、こちらを見て、なにか話しあっています。

「なんと、おろかな人たちだろう。ろばのせなかにのっていけばいいのに、ふたりとも歩いてる。」

たび人たちは、こんなことをいっているのです。

ふたりは、これをきいて、なるほどと思いました。

「では、わたしがのっていくことにしよう。」
と、おとうさんのほうがのりました。

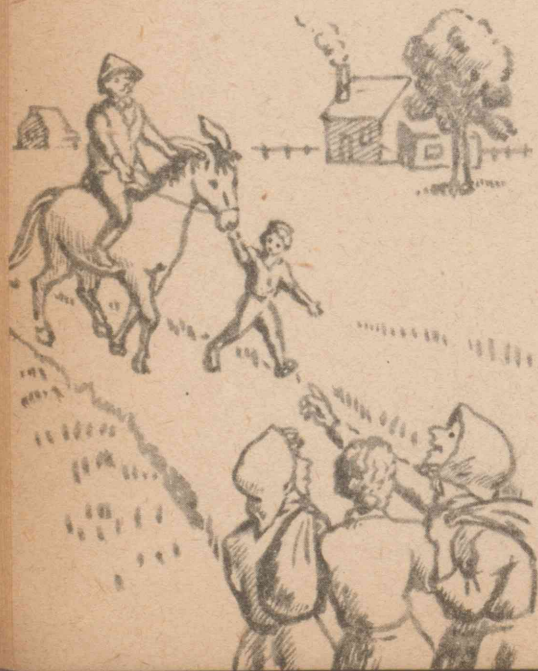
ふたりは、また歩きだしました。ろばのせなかにのったおとうさんは、いい気持でした。

少しいくと、女のたび人にあいました。女のたび人たちは、こちらを見て、

「なんと、おろかな人だろう。自分だけろばにのって、子どもを歩かせていい気持なのだろうか。」
と、いっています。

おとうさんはこれをきいて、ろばからとびおりました。

「あの人たちのいうとおりだ、どうしていままで気がつかなかったのだからとびおりました。」



う。」と、思いました。

こんどは、子どもがのっていくことにしました。

どんどん歩いて、のはらにでました。のはらにはたくさんの子どもが遊んでいました。ふたりは、子どもたちが、

「なんと、おろかな子どもだろう。自分がろばにのって、おとうさんを歩かせている。」

と、いっているのを、ききました。子どもはとびおりました。

おとうさんがのってもいけないし、子どもがのってもわらわれるのです。ふたりはどうしていいのか、わからなくなりました。

しばらく考えていましたが、子どもが、

「おとうさん、ふたりでのとったらいいのじゃない。」

と、いいました。

「それは、いい考えた。」

と、おとうさんは手をうって喜びました。

ふたりは、いっしょにのっていききました。

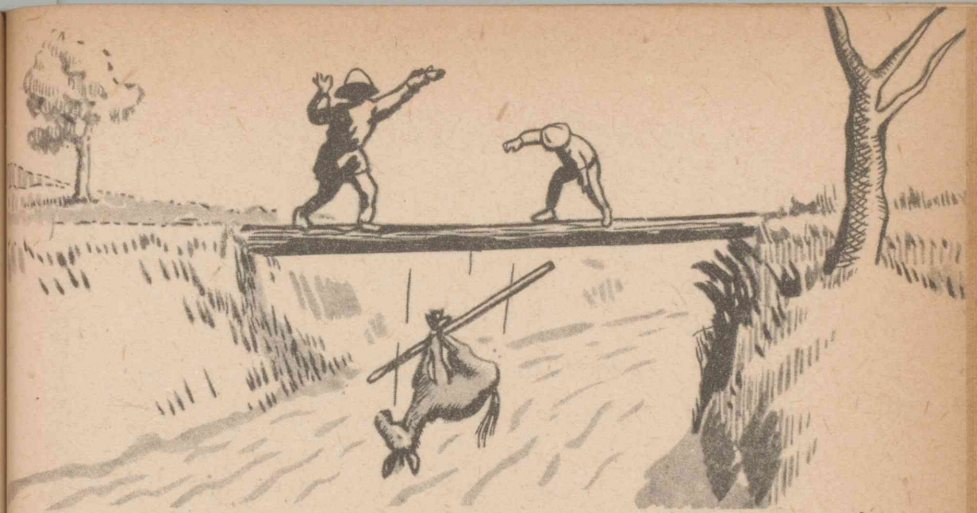
村の人たちはこれを見て、

「なんと、おろかな人たちだろう。ふたりでろばにのっている。ろばが、かわいそうだとは思わないのだろうか。」

と、いって、わらいました。

これをきいて、ふたりはあわてて、ろばからおりました。

なるほど、ろばがかわいそうだと思って、ふたりはいろいろと考えました。



「よし、ろばをかついでいこう。これが一ばんいいぞ。」

と、おとうさんがいいました。

ふたりは、ろばの足をしっかりむすびました。それにぼうをおして、かついでいきました。

町の近くの一本ばしにきました。

そのとき、ろばは苦しくなってあばれだしました。

ふたりが急いで歩こうとすると、ろばはひどくあばれます。

とうとう、川の中へおちてしまいました。

二 じまんのかきの木

秋になると、どこの家のかきの木も、みがたくさんなります。

「きょうは、きみの家を取ろう。」

「あしたは、ぼくの家のかきだ。」

村の子どもたちは、毎日木のぼりをして、かきを取ってたべるのが、なによりの楽しみでした。

どんな家にもかきの木があるというのが、この村のじまんのひとつでもありました。

そういう村に、もくへいさんという人がすんでいました。

もくへいさんは、大へんなはたらきものでした。

朝は早くから、夜はおそくまでいっしょうけんめいはたります。どんなにさむくても、どんなに風がふいても、もくへいさんがたんぼに見えない日はありませんでした。

村の人も、もくへいさんののはたらきぶりには、感心していました。もくへいさんのたんぼは、村のどこのたんぼより、よくできます。にんじんもなっばも、たいへんりっぱなものができます。

もくへいさんが、自分の作ったものを持って、町に売りにいくのをよく見かけます。

ところが、もくへいさんには、ひとつのわるいくせがありました。それは、じまんをするということです。

どんなことでも、もくへいさんは村じゅうの人に、じまんをしな

ければ気がすまないのです。

いねかりが早くすんだといっってはじまんをし、まめが大きくなつたといっっては、じまんをします。

村の人は、もくへいさんのことを、「じまんもく」とか、「じまんへいさん」とかいうこともありました。

「あれは、じまんをするために、はたらいっているのだよ。」などという人もありました。

あるとき、もくへいさんは、町へ買い物にいきました。

もくへいさんは、なにかじまんになるようなものはないかなと思つて、とおりを歩いていました。

ふと見ると、きれいなしらがのおじいさんがすわっています。

おじいさんは、ねむったようにじっとして
います。どうしたのだらうと思つて、も
くへいさんは近よつていきました。

すると、そのおじいさんはしずかに目を
あけて、もくへいさんを見ました。そして、

「きみは、じまんをしたいのではないかね。」
と、いいました。

もくへいさんはおどろいて、

「そうです、そうです。わたしはじまんを
したいのです。だが、どうしてそんなこ
とがわかるのですか。」

と、ききました。

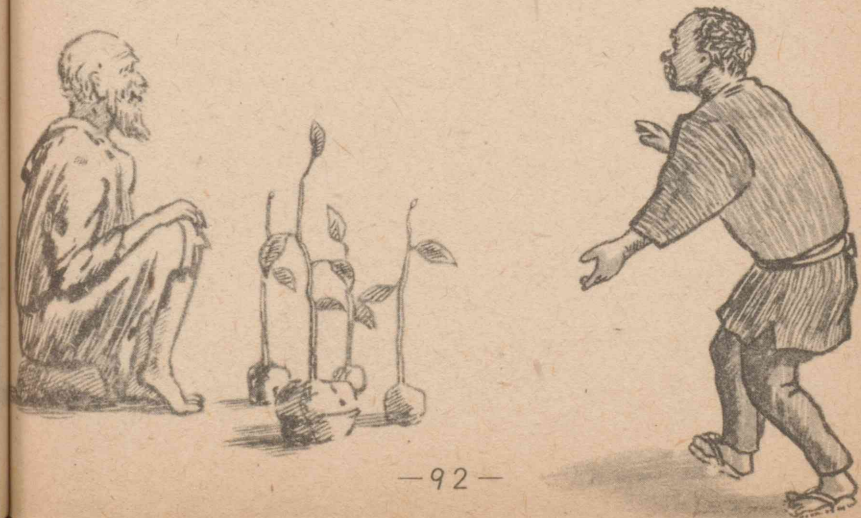
すると、おじいさんはそれには答えな
いで、

「じまんをしたいのなら、このかきの木を買
つていきなさい。」
と、いいました。

いままで気がつきませんでした。おじい
さんのまえには、小さな
なかきの木が二三本おいてあります。

もくへいさんはうれしくなつて、すぐ、
そのかきの木を買うこと
にしました。おじいさんは、

「このかきの木は、きつと、どこのかきの
木よりも大きくなります。
しかし、一どだけはじまんをしても
いいが、二ど三どとじまんを
してはいけないよ。やくそくでき
るかな。」



と行って、もくへいさんをじっと見ました。

もくへいさんは、そんなおじいさんのことばより、じまんができるということ、じっとしていられなくなりました。

「はい、はい、わかりました。きつと、おことばどおりにします。」
と行って、喜んでそのかきの木を買いました。

これはいいものを手にいれたぞ、と思いながらもくへいさんは、急いで家に帰っていきました。

にわの日あたりのいいところに、それをうえました。

それから毎日、もくへいさんはいっしょうけんめいに、せわをしました。

すると、どうでしょう。かきの木は、みるみるうちに大きくなつていきます。家のやねよりも高くなつていきます。ほかのどの家のかきの木よりも、大きくなつていきます。

村の人たちは、「ふしぎなことだ。どうして、あんなに高くなつていくのだらうか。」と思ひました。

となりの村からも、とおくの村からも、このふしぎなかきの木を見にきました。

このかきの木の下をとおる人はみんな、大きな木を見あげて感心していきました。

もくへいさんは、うれしくてうれしくてたまりません。もう、じっとしていられなくなりました。

ある日、村じゅうの人を集めて、



「どうです。このかきの木を見なさい。わたしが
そだてたのです。こんな大きなかきの木は、よそ
にはないだろう。いや、世界じゅうにだってない
にちがいない。」

「といって、じまんをしました。」

まもなく、秋になりました。あちらこちらのかきが

赤くなって、子どもたちの一ばん楽しいときになりました。

ところが、どうしたわけか、もくへいさんのかきの木には、みが

ひとつもありません。下から見ると、あおい葉がたくさん見えるだ
けです。村の人たちは、

「なんだ、じまんのかきの木に、みがならないじゃないか。木が大
きいばかりでは、やくにはたたない。」

「といって、わらいました。」

もくへいさんも、これにはちよつとこまりましたが、

「いや、これは上のほうに、みがなっているにちがいない。あまり
高いところにあるので見えないのだろう。」

「思っ、かきの木にのぼることにしました。」

もくへいさんは、長いはしごを作りました。

「さあ、これでよし。きつと、おいしいかきがなっているぞ。たく



さん取ってきて、村の人にじまんをしてやろう。」

と思ひながら、はしごをのぼっていききました。

かきの木は空にとどくほど高いのですから、のぼるといってもなかなか大へんです。もくへいさんは、いっしょうけんめいのぼっていききました。それからどれくらいしてからでしょうか。

もくへいさんは、のぼりつかれてしまいました。一本の大きなえだのところでは休みました。いい空気をすおうと思つて、りょう手をあげて上を見ました。

「ある、ある。まっかなかきが、たくさんなっている。いままでに見たこともないような大きなかきだ。」

もくへいさんは、おどりあがって喜びました。

つかれもわすれて、そのおいしそうなかきをたくさん取りました。

「さあ、早く帰つて、村の人にじまんをしてやろう。」

と思つて、もくへいさんは、かきの木からおりてきました。

「かきの木の下に、集まってくださあい。」

「かきの木の下に、集まってくださあい。」

という、声がかきこえます。村の人は、なんだろうと思つて、みんな集まってきました。すると、もくへいさんは、

「みなさん。このかきをよく見なさい。これが、あの大きな木になつていたんです。こんな大きな、こんなきれいなかきは、よそにはないだろう。いや、世界じゆうにだってないにちがいない。」
といつて、じまんをしました。

村の人たちは、

「また、もくへいさんのじまんがはじまったな。」

と思いましたが、かきのりっぱなものには、感心してしまいました。

そのことがあって、少ししてからです。どうしたことか、もくへいさんのかきの木は、だんだん元気がなくなっていきます。

「これはいけない。」と思つて、いっしょうけんめいせわをしました。が、それでも弱つていきます。

かきの木は、とうとうかれてしまいました。

もくへいさんは、かれたかきの木の下に立って、しらがのおじいさんのいったことばを考えていました。

三 二ひきのいぬ

おかあさんいぬは、かわいい二ひきの子いぬといっしょに、森の中であそんでいました。

ある日、おかあさんいぬは子いぬをよんで、

「おまえたちは、もう、大きくなったのだから、自分ではたらいしてあわせになりなさい。しょうじきにはたらくことが一ばんだいじですよ。」

と、いってきかせました。

くろもしろも、おかあさんいぬにわかれて、うちをでました。

それは、月の明るいばんでした。町の近くのをかれ道にきました。



にいきんいぬのくろは、

「しろちゃん、ここでわかれるよ。どちらかがしあわせになったら、また、いっしょになろうね。」

と、いいました。しろは、

「ぼくもしょうじきにはたらくよ。にいきんさようなら。」と、いいました。

お月さまは、二ひきの子いぬをやさしく見送っていました。

くろは、ひとりで道を歩きました。町の人はみんな、ねていてしずかです。学校の上このひろばにでました。

そこには、二ひきの赤いぬがいました。赤いぬは、

「きみ、どうしてここにきたの。」

と、いいます。くろは、

「ぼくは、しあわせなうちにいきたいと思って、ここにきました。」と、いいました。赤いぬは、

「ぼくらのなかまにはいり。おいしいものを取りにつれていってあげるよ。」と、いいました。

くろは、町のようにすがわらないので、赤いぬのなかまにはいりました。赤いぬたちは、おなががすくと人の家にはいって、さかなを取ったり、肉を取ったりしました。

ときには、かつてあるうさぎを取ることもありました。人にみつけられると、おいかけられました。大きなたけで、うたれることも

ありました。

くろは、だんだんわるくなっていきました。小さいいぬたちのたべものを取りあげるほど、カも強くなりました。

それでも、夜になると、おかあさんのことを思ひだして、

「おかあさんにすまない。」と、考えることもありました。月の夜わかれた、「しろ」のことを思ひだすこともありました。

そんなときには、自分がわるいいぬになってしまったことを、はずかしく思いました。

にいさんにわかれたしろは、町の中を歩いていました。二ひきの知らないいぬにいました。

「きみ、ぼくらのなかまにおはいいり。」と、いいました。しろは、

「ぼくは、人のうちにいくのです。」

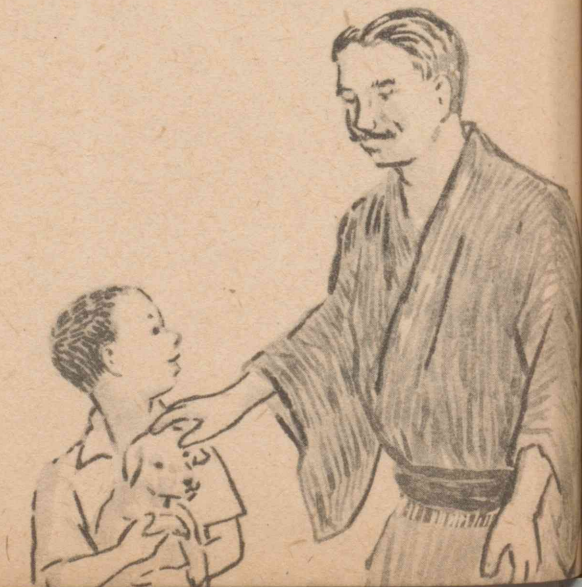
といって、なかまにはいりませんでした。

きれいな家のまえにきました。しろは、門のところで休みました。わるい人がやってきて、その家にはいろうとしました。

しろは、大きな声でうちの人に知らせてあげました。

おとうさんらしい人がおきてきました。わるい人は走ってにげていきました。

夜が明けました。三年生ぐらいのぼっちゃんがでてきて、しろを



見て、「おいで、おいで。」と、いいました。

しろがついていくと、きれいなにわにでました。ぼっちゃんが、「おとうさん、ゆうべほえていたのは、このいぬではないの。」と、いいました。おとうさんは、

「そう、そう。このいぬだったね。このいぬがほえたので、わるいものがにげたのだよ。お礼においしいものをやりなさい。」と、いいました。ぼっちゃんが、

「かわいいいぬだから、かっってくださいね。」
というと、おとうさんは、

「かわいいがるなら、かっであげよう。」
と、いいました。しろは、このうちにかわれることになりました。

しろは、ぼっちゃんのお友だちになりました。

ぼっちゃんが遊びに行くときには、いつもついていきます。ぼっちゃんといっしょに、おつかいもします。夜になると、とりごやのばんをします。

おうちの人のいいつけをよくきくので、「しろ。しろ。」と、みんなからかわいがられるようになりました。

あるとき、近所のねこがひよこを取りにきたので、大きな声をだすと、おどろいてにげました。おかあさんが、「しろはおりこうね。」
といって、ごはんのとき、さかなをくださいました。

しろは、しあわせな日を送りました。夜になると、おかあさんいぬのゆめを見ることがありました。また、にいさんいぬのゆめを見

ることもありました。

あるばんのことでした。お月さまは、に
わを明るくてらしていました。

うちの人はみんなねてしまって、まえの
道を通るおまわりさんのくつの音だけが、
きこえていました。

しろは、とりごやのよこの自分のうちに休んでいました。とおく
のほうから、足音がだんだん近よってきました。しろは、すぐとり
ごやのまえにでました。

見ると、一ぴきの強そうないぬが、にわとりを取りにきたのです。

しろは「わん、わん。」と、大きな声でほえました。それでも、む
こうのいぬはにげません。とりごやに手をかけました。しろはその
いぬにとびつこうとしました。

むこうのいぬの顔を見たとき、しろは、おどろいてとまりました。
むこうのいぬも、しろを見てとびつくのをやめました。そのいぬは、
にいさんのくろだったのです。

「にいさん。」

「しろちゃんか。」

ニひきのいぬは、お月さまの光の中で、顔を見あわせました。

「にいさん、ここは、ぼくのだいじなぼっちゃんのうちです。ぼっ
ちゃんのおかげで、ぼくはしあわせになっっているのです。そんな



わるいことはやめてください。」

と、しろはいいました。

くろは、しろの顔を見ると、おかあさんとわかれたときのことを思い出しました。いままでのことがわるかったと思いました。

「にいさん、もうどこへもいかないでください。あした、ぼくがぼっちゃんにおねがいして、ここにおいていただきますから。」

と、しろはいいました。

くろは、だまってないていました。

それから、しろもくろも、しあわせになりました。



おしごとの手びき

(一) あたらしい友だち

1. なかむらはるおくんのところを読んで、なかむらくんが学校にはいった日、まさおくんがしんせつにしてあげたじゅんに、ならべてごらんさい。

○なかむらくんに本を見せてあげた。

○学級の畑につれていった。

○としょしつにつれていった。

2. なかむらくんはどんな人だと思いき

か、

3. 「わからないことば」のお話は、おもしろいでしょう。まさおくとなかむらくんのお話は、二つのことばのちがいです。二つのことばのちがいをノートに書きだしなさい。まさおくんのおとうさんと、たばこやのおばさんの話は、どんなことばのちがいでしょう。本を読めば、それがはっきりでています。

わからないことばは、どこにでもある

ものです。自分のいつもつかっていることばを、本にでていることばにくらべて、ちがっているのを集めてごらんなさい。かずが多くなったら、五十おんじゆんにわけておきます。そうして、それにただしのことばを書きそえて、くらべてみるのです。おもしろいことばの研究ができます。あたらしいお友だちが、学校にはいつてくるようなことがあったら、その人からわからないことばをきいてごらん。おもしろい研究がいくらでもできます。

○たくさん集まって、いちどにはれないので、じゆんじゆんにはりだすことにした。

○はじめに、うたと作文をはった。

2. 「みんなのうた」のところを、読んでみましょう。

(イ) いさむくんの「あめ」のうたのちよ
うしがいのは、

あめがしずかに…(七) ふってます…(五)
金の水たま…(七) ぼっつりこ…(五)
のように、「七」と「五」からできてい

(二) てんじばん

1. てんじばんのところをよく読んで

ぎのことをしらべましょう。

(イ) まさおくんたちのてんじばんには、
どんなものをはりだしますか。

(ロ) まさおくんと、すみこさんが、てん
じばんのかかりになって、したり考え
たりしたこと、よいと思うものに○
わるいと思うものに△をつけなさい。

○十日ぐらいではりかえる。

○うたや作文を高いところにはった。

るからです。「あめ」のうたを、ぜんぶ
しらべてごらんなさい。

このほか、「五」と「七」、「七」と「七」
「五」と「五」などのときも、ちよ
うしがいのです。いろいろうたについ
てしらべてごらんなさい。

(ロ) 「あめ」のうたで、あめがしずかにふ
っているようすは、なんでわかりますか。

(ハ) 「ダリヤ」のうたで、しずかできれい
な朝の教室のようすがでていのは、
どこですか。

(二) 波がすなどお話するといふのは、どんなことでしょう。また、このうたでおもしろいのは、どんなことでしょう。

おもしろいのは、どんなことでしょう。

(ホ) うたは、作文とおなじように、みな

さんが見たり、思ったりしたことを書

けばいいのです。みなさんも、ここに

でているようなたを、たくさん作っ

てみましょう。

3. 「ペニーのなまえ」の作文で、ゆきこさ

んがペニーをかわいがっている気持ちがど

こにでていますか。

4. こまのところを読んで、つぎのことを

作りかたのじゅんじょにならばなさい。

○ふたりでまわしあいをした。

○かいてんばんにもようを書いた。

○しんぼうを四かくにした。

○はこのふたにまるい形を書いた。

○しんぼうの上のほうをほそく、下のほ

うをふとくした。

5. みなさんも、なにか自分で作ったもの

について、作ったじゅんに文を書いてご

らんなさい。作りかたをえてあらわすこ

ともくふうしてごらんなさい。

6. みなさんの教室のてんじばんには、ど

んなものがはってありますか。まさしく

んたちの学級のように、自分たちの手で

てんじばんをりっぱにしていきましょう。

(三) おもしろい研究

1. おたまじゃくし日記を読むと、おたま

じゃくしが、どんなかわりかたをして、

大きくなったかがわかります。つぎのこ

とをこの日記からしらべましょう。

(イ) たまごがすっかりかえるになるまで

に、なん日かかりますか。

(ロ) おたまじゃくしが、つぎのようにな

るのは、たまごを見つけから、なん

日ぐらいしてからのことでしょう。

○たまごが、かんでんのひものようなも

のの中からでてくる。

○たまごがだるまのようになる。

○えらがでる。

○おがすこしのびて、おたまじゃくしの

形になる。

○おたまじゃくしがおよぎはじめる。

○あと足が、ではじめる。

○おたまじゃくしが虫をたべるようになる。

○まえ足の、かたほうがではじめる。

○まえ足とあと足がでそろう。

○おたまじゃくしが大きくなって、水の

上へでようとす。

2. おたまじゃくし日記と、ふつうの日記

とは、どんなところがちがっていますか。

3. 「あり」や「とんぼ」をかったり、「あさ

がお」や「へちま」などを作って、その

日記を書いてみましょう。

4. くものところをなんべんも読みまし

う。どこがおもしろいと思いますか。

5. にわの木やえだに、いろいろなくもが

すをはっています。それぞれ、みなちが

ったところがあります。

よく気をつけて、見てごらん下さい。

きつとおもしろいことがわかりますよ。

ここにでてくるくもは、

(イ) どんなにして虫をとりますか。

(ロ) 虫がかかったことを、どうして知る

のですか。

6. つぎのことばをじゅんじょよくならべ

て、お話のわかるようにしてください。

(イ) ○くろいかげが ○風がふくと ○池

のまわりには ○水にうつっています

○もみじの木があつて ○のびたりち

ぢんだりします ○かげが

(ロ) ○顔をあらつて ○学校にいきました

○朝おきて ○国語のじかに ○ほめ

られました ○作文を書いて ○学校で

は ○先生に

(四) わたくしたちのげき

1. お友だちと話しあつて、げきをしまし

よう。

(イ) げきの「だい本」というのは、どん

なものですか。

(ロ) 本には、なんという「だい本」が書

いてありますか。

(ハ) みなさんが、やってみたいと思う

「だい本」を、いろいろ集めてごらん。

(ニ) げきをするのには、どんなじゅんじ

よでしたらいいのでしょうか。

ノートにじゅんに書きなさい。

(ホ) 「やくわり」をきめるとき、どんなことに気をつけたらよいのでしょうか。

(ヘ) 「本読み」のときにはどんなことに気をつけますか。

(ト) 「けいこ」のときにはどんなことに気をつけたらいいでしょう。

(チ) 人のまえでするときにはどんなことを考えていたらいいのでしょうか。

2. 「森の中」のたい本を読んでみましょう。
(イ) できるものはなにとなにですか。にんずうもしらべなさい。

○かわいそうだから。

○助けて助けてと叫びたから。

(ヘ) このげきは、なんぶんでできますか。やってみて、はかってごらんください。

(五) いろいろの話

1. お話がみつつありますね。どれもおもしろい話です。くりかえして読んで、人のまえでお話できるようにしましょう。そのためには、お話のすじをはっきり研究しなければなりません。

2. 「ろばを売ろうとしたおや子の話」

(ロ) どの「やく」を男子にし、どの「やく」を女子にしたらいいでしょう。

(ハ) このげきで、ちゅうしんになる「やく」はなにですか。

(ニ) このげきのおもしろいところはどこですか。

(ホ) どうして、おわりにとらを助けたのでしょうか。いいと思うところに○をつけなさい。

○おそろしいから。

○みんなおなじなかまだから。

(イ) つぎのことをお話のじゅんじよにならべてごらんください。

○ろばは川の中へおちてしまった。

○おとうさんがろばにのった。

○ろばをかついでいった。

○ろばをひいていった。

○子どもがろばにのっていった。

(ロ) このお話のどんなところがおもしろいと思えますか。

(ハ) このようなおもしろい話を、集めてみましょう。

3. 「しまんのかきの木」を読んで、研究してみましよう。

(イ) お話のすすんでいくじゅんじょに、ならべなさい。

○もくへいさんが、かきの木のだまんを
しました。

○しらがのおじいさんから、かきの木を
買いました。

○もくへいさんにはじまんをする、くせ
がありました。

○かきの木が、大きくなりました。

○くろがわるいいぬになったのは。

○しろがぼっちゃんの家にかわれるよう
になったのは。

○しろとくろがあうことができたのは。

○しろもくろも、しあわせになることが
できたのは。

(ロ) お話のどこがおもしろいですか。

(ハ) お話を読んでなにを思いましたか。

5. かんじのれんしゅうをしまししよう。

おわりの「かんじびょう」を見て、しっか
り、れんしゅうしなさい。書くじゅんには

○かきの木がかれました。

○もくへいさんが、かきのみのだまんを
しました。

(ロ) かきの木がかれたのは、どうしてで
しょうか。

(ハ) お話のおもしろいのはどこですか。

(ニ) このお話を読んで、どんなことを思
いましたか。

4. 「二ひきのいぬ」のお話を研究しまししよう。

(イ) なぜですか。

○しろたちがおかあさんとわかれたのは。

きまりがありますから、研究しまししよう。

6 おもしろいことば

(イ) 金の水たまぼっつりこの「ぼっつり

こ」は、水のおちるようす。

さっさとにげましたの「さっさ」は、
にげるようすをあらわしています。こ
んなことばを集めてごらんなさい。

(ロ) 「ブーン」とはちがとびました。

しろが「わんわん」となきました。

「ブーン」や「わんわん」は声や音をあらわ
しています。集めてごらんなさい。

かね	7	くうき	46	こま	20
かみ	58	くせ	90	さくぶん	10
かみきった(かみきる)	50	くみつきました(くみつく)	50	ささやきます(ささやく)	77
ガラツ	21	くも	48	さしき(おさしき)	24
かれて(かれる)	100	くるしい	71	ざっし	29
かんしん	28	クレヨン	53	しあわせ	101
かんてん	40	くろ	101	しごと(おしごと)	18
きく	13	くわ	12	しずみかけた(しずみかける)	81
きのどく	9	けんきゅう	39	しぬ	46
きめて(きめる)	19	け	25	しばらく	12
きようしつ	7	こくばん	55	じまん	11
きん	22	こころ	81	しゃせい	54
きんぎよばち	39	こたえない(こたえる)	93	じゃれつきます(じゃれつく)	26
きんじよ	83	コップ	30	じゅんじゅん	19

あたらしくてたことは

あたま	58	うえて(うえる)	59	おそろい	75
あたらしい	4	うずまき	43	おたまじゃくし	39
あばれたす(あばれる)	88	うつ	12	おなじ	33
あまり	63	うる	13	おぼえて(おぼえる)	28
あめ	10	うんどうば	7	おまえ	68
いき	41	えら	41	おろかな(おろか)	83
いじわる	81	お	26	かいてんばん	29
いたい	68	おおく(おおい)	17	かう	39
いっしゅうかん	35	おかげ	109	かえる	39
いっとう	10	おかね	14	かかり	6
いぬ	25	おしい	72	かたほう	45
いや	79	おそく(おそい)	90	かついで(かつぐ)	88
いろいろ	18				

のぞきこみます(のぞきこむ) 80
 ねがい(おねがい) 76
 ぬりわけました(ぬりわける) 30
 にく 103
 にいさん 27
 なるほど 84
 なまえ 20
 なぐさめて(なぐさめる) 9
 なかむらはるおくん 4
 とりごや 107

はこ 25
 はたらいた(はたらく) 72
 はち 48
 はね 49
 ばん 108
 ひきかえました
 (ひきかえす) 16
 びくびく 78
 ひげ 58
 ひまわり 60
 ひも 40
 びょうき 67
 ひろいました(ひろう) 51
 ひろば 102

ブーン 48
 ふしぎ 13
 ぶたい 64
 ふとく(ふとい) 31
 ふへい 8
 へたな(へた) 11
 ペニー 20
 へん 16
 べんきょう 25
 ぼうふら 44
 ほえて(ほえる) 106
 ほお 57
 ほくろ 55
 ほそながく(ほそながい) 41

しょうじき 101
 しらが 91
 しわ 57
 しんせつ 4
 しんぼう 30
 すいついて(すいつく) 42
 すいれん 59
 すき 69
 すっかり 47
 すわって(すわる) 91
 せかい 96
 せなか 84
 センチメートル 42

そうだん 83
 そだてた(そだてる) 96
 そば 79
 たいいく 8
 だいじな(だいじ) 73
 だいほん 62
 たのしく(たのしい) 71
 たのしみ 38
 たのみました(たのむ) 83
 たばこ 13
 タリヤ 20
 たれた(たれる) 51
 ちぢんだ(ちぢむ) 59
 ちょうし 36

つかって(つかう) 17
 つかれた(つかれる) 72
 つついて(つつく) 51
 つな 82
 つばめ 23
 てらして(てらす) 108
 てんじばん 18
 てんせん 23
 と 21
 どうく 63
 とおして(とおす) 88
 どうり(どうり) 56
 としょしつ 5
 とりかえる 35

通 (108)

答 (93)	事 (78)	天 (69)	葉 (60)	死 (46)	自 (37)	毛 (25)	教 (18)	負 (9)	友 (4)
世 (96)	所 (83)	秋 (69)	歌 (61)	夏 (48)	分 (37)	持 (26)	室 (18)	文 (10)	級 (4)
界 (96)	歩 (84)	助 (71)	会 (62)	弱 (49)	研 (39)	色 (29)	書 (18)	気 (11)	休 (5)
明 (101)	村 (87)	苦 (71)	森 (62)	急 (50)	究 (39)	形 (29)	集 (19)	元 (11)	読 (6)
送 (102)	家 (89)	楽 (71)	男 (62)	顔 (53)	記 (39)	回 (31)	波 (20)	遊 (12)	話 (6)
肉 (103)	毎 (89)	残 (74)	週 (64)	細 (53)	外 (40)	間 (32)	花 (21)	帰 (12)	女 (6)
知 (104)	夜 (90)	心 (75)	強 (65)	写 (54)	息 (41)	長 (33)	朝 (21)	売 (13)	畑 (7)
門 (105)	感 (90)	配 (75)	喜 (65)	頭 (58)	動 (42)	短 (33)	金 (22)	買 (14)	作 (7)
礼 (106)	物 (91)	用 (78)	病 (67)	池 (59)	取 (43)	高 (34)	銀 (22)	多 (17)	勝 (8)

むら.....	87	むすびました(むすぶ).....	88	み.....	66	みおくって(みおくる).....	102	みどり.....	31	まいて(まく).....	50	まいにち.....	69	まく.....	65	まちがう.....	14	まて(まつ).....	73	まめ.....	91	むらさき.....	31	ぼっちゃん.....	105	ぼつりこ.....	22	ほんよみ.....	63	めいめい.....	58	ゆび.....	45	ゆるく(ゆるい).....	32	ゆるさない(ゆるす).....	67	よりなやす(やりなおす).....	64	やつ.....	78	やくそく.....	93	やくわり.....	62	やさしそ(やさしい).....	57	わかば.....	22	わかれて(わかれる).....	101	りっばな(りっば).....	90	りレー.....	8	ろば.....	83	らしい.....	6	よわって(よわる).....	33	よそ.....	96	ようじ.....	78	ゆるる(ゆるい).....	32	ゆるさない(ゆるす).....	67	ゆび.....	45
---------	----	------------------	----	--------	----	------------------	-----	----------	----	--------------	----	-----------	----	---------	----	-----------	----	-------------	----	---------	----	-----------	----	------------	-----	-----------	----	-----------	----	-----------	----	---------	----	---------------	----	-----------------	----	-------------------	----	---------	----	-----------	----	-----------	----	-----------------	----	----------	----	-----------------	-----	----------------	----	----------	---	---------	----	----------	---	----------------	----	---------	----	----------	----	---------------	----	-----------------	----	---------	----

Copyright 1949, by
The Gakkō Toshō Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国309

国語三年生 上
Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 22, 1949)

表紙とさしえ

齋藤原小大今
藤原田川西石
長輝直利久光
三夫茂雄一美

執筆担当者

森岡文策
廣島高等師範学校教諭

会 長

廣島高等師範学校教授

兼附屬小学校主事

編者

廣島市東千田町

廣島高等師範学校附屬小学校内

財団法人

学校

図書

研究会

感謝のことは

「あり」………北原白秋氏編
「児童詩の本」中 児童作
右の作品を本書に掲載させていただきました
ましたことについて、著作者の方に厚
く感謝申し上げます。

著作者

廣島市東千田町廣島高等師範学校内
財団法人 学校図書研究会
会 長 森岡文策

発行者

東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎

印刷者

東京都港区芝三田豊岡町八番地
図書印刷株式会社
代表者 川口芳太郎

発行所

東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

国語三年生上の編修について

一、本書は、教育基本法、学校教育法、学習指導要領一般編、同国語科編、小学校国語科検定基準などの趣旨を具体的にあらわすことにつとめた。児童の興味や生活経験や心理的発達に即して単元学習をはかっているのもこのためである。

二、三年生用は上・下二冊とし、上は四月から十月まで、下は十一月から三月までに学習するように構成されている。

三、本書は五つの単元からなり、「あたらしい友だち」では、転入生の問題から児童の生活を反省し、「てんじばん」では、国語活動の面から自治生活を建設し、「おもしろい研究」では、科学的態度への眼を開き、「わたくしたちのげき」では趣味ある表現活動をなし、「いろいろな話」では、豊かな心情を培うことをめあてとしている。これらの五単元は、ただ断片的に取りあげられたのではなく、国語の活動の面から、しかも、児童みずからの間

題として展開し得るよう特別の工夫をしてい

る。即ち、一・二年の基礎的な国語力をもととし、どのように国語活動を展開すべきかを明らかにしている。本書を学習することによって、児童は各種の問題を発見し、処理していくことができるのである。

四、本書の新出語いは総数百九十七語である。

文章は、児童の生活言語のうち、基本的なことばを用いた敬体をもとし、かつ、常用口語への発展をもはかっている。

五、かなは平がなを本体とし、擬声語、擬態語、外来語を写す場合にのみかたかなを用いた。漢字は新出九十字である。一・二年に比し多くの漢字を提出しているのは、用意あつてのことである。

六、巻末に語い表と「おしごとの手びき」をのせて、学習の便をはかっている。本巻から「おしごとの手びき」を多くしているのも、本年の国語活動を深く考へてのことである。

昭和二十四年七月 八 日 刷
昭和二十四年七月 十二 日 発 行
昭和二十四年十月 二十二 日 再 版 印 刷
昭和二十四年十月 二十六 日 再 版 発 行

定 價 一 円 二 銭

0130449665

広島大学図書

01 0130449665

